# 受難節第１主日礼拝説教 「試みられてこそ…」

日本基督教団石神井教会　2019 年 3 月 10 日

**【旧約聖書日課】申命記　6章10～19節**

10あなたの神、主が先祖アブラハム、イサク、ヤコブに対して、あなたに与えると誓われた土地にあなたを導き入れ、あなたが自ら建てたのではない、大きな美しい町々、11自ら満たしたのではない、あらゆる財産で満ちた家、自ら掘ったのではない貯水池、自ら植えたのではないぶどう畑とオリーブ畑を得、食べて満足するとき、12あなたをエジプトの国、奴隷の家から導き出された主を決して忘れないよう注意しなさい。13あなたの神、主を畏れ、主にのみ仕え、その御名によって誓いなさい。14他の神々、周辺諸国民の神々の後に従ってはならない。15あなたのただ中におられるあなたの神、主は熱情の神である。あなたの神、主の怒りがあなたに向かって燃え上がり、地の面から滅ぼされないようにしなさい。

16あなたたちがマサにいたときにしたように、あなたたちの神、主を試してはならない。17あなたたちの神、主が命じられた戒めと定めと掟をよく守り、18主の目にかなう正しいことを行いなさい。そうすれば、あなたは幸いを得、主があなたの先祖に誓われた良い土地に入って、それを取り、19主が約束されたとおり、あなたの前から敵をことごとく追い払うことができる。

**【使徒書日課】ローマの信徒への手紙　10章8～13節**

8では、何と言われているのだろうか。

「御言葉はあなたの近くにあり、あなたの口、あなたの心にある。」

これは、わたしたちが宣べ伝えている信仰の言葉なのです。9口でイエスは主であると公に言い表し、心で神がイエスを死者の中から復活させられたと信じるなら、あなたは救われるからです。

10実に、人は心で信じて義とされ、口で公に言い表して救われるのです。11聖書にも、「主を信じる者は、だれも失望することがない」と書いてあります。12ユダヤ人とギリシア人の区別はなく、すべての人に同じ主がおられ、御自分を呼び求めるすべての人を豊かにお恵みになるからです。13「主の名を呼び求める者はだれでも救われる」のです。

**【福音書日課】ルカによる福音書　4章1～13節**

1さて、イエスは聖霊に満ちて、ヨルダン川からお帰りになった。そして、荒れ野の中を“霊”によって引き回され、2四十日間、悪魔から誘惑を受けられた。その間、何も食べず、その期間が終わると空腹を覚えられた。

3そこで、悪魔はイエスに言った。「神の子なら、この石にパンになるように命じたらどうだ。」4イエスは、「『人はパンだけで生きるものではない』と書いてある」とお答えになった。

5更に、悪魔はイエスを高く引き上げ、一瞬のうちに世界のすべての国々を見せた。6そして悪魔は言った。「この国々の一切の権力と繁栄とを与えよう。それはわたしに任されていて、これと思う人に与えることができるからだ。7だから、もしわたしを拝むなら、みんなあなたのものになる。」8イエスはお答えになった。「『あなたの神である主を拝み、ただ主に仕えよ』

と書いてある。」

9そこで、悪魔はイエスをエルサレムに連れて行き、神殿の屋根の端に立たせて言った。「神の子なら、ここから飛び降りたらどうだ。10というのは、こう書いてあるからだ。『神はあなたのために天使たちに命じて、あなたをしっかり守らせる。』11また、『あなたの足が石に打ち当たることのないように、天使たちは手であなたを支える。』」12イエスは、「『あなたの神である主を試してはならない』と言われている」とお答えになった。

13悪魔はあらゆる誘惑を終えて、時が来るまでイエスを離れた。

**受難節の《断食》**

すでに先週の水曜日（灰の水曜日）から始まっていますが、教会の暦は「受難節（レント）」に入りました。聖壇の掛布（典礼色）は、悔い改めの期節を示す「紫色」に掛け替えられました。悔い改めと、断食と、祈りと、愛の施し。これらのことを特に集中して実践する期節として、教会は「受難節」に 46 日間、平日の 40 日と 6 回の主日を充ててきました。平日に充てられた 40 日は、もちろん、主イエスが荒れ野で誘惑をお受けになられた**四十日間**に倣ったことです。

主イエスは、成人されておよそ 30 歳から宣教活動をお始めになられたと言われています。その最初に洗礼者ヨハネから洗礼をお受けになられると、まず聖霊によって荒れ野に連れ出されて、悪魔から誘惑を受けられる四十日を過ごされました。その間、何も食べずに過ごされたのは、もちろん、食べ物の用意がなかったからではありません。断食をされたのです（マタイ 4:2）。ご自分の意志で、食事を断たれたのです。

主イエスのなされた断食に倣って、受難節の間、断食に取り組む人たちがいます。まったく食べないというわけではなく、普段の食事から何かを制限するのです。古くから為されてきたのは肉を断つことでした。受難節の期間、肉を食べないのです（そのかわりに、受難節の前に肉を食べておく「謝肉祭（カーニバル）」が発達しました）。とは言え、まったく肉を食べないわけにもいかないので、最近は、週に一度、金曜日だけは肉を食べずに魚を食べる、という形で受難節の「断食」の習慣を保とうとしている人たちも少なくないようです。もちろん、そこまでして形式的に断食の習慣を残しても仕方ないと考える人たちもいました。そこで、教会によっては、この期間に嗜好品や間食を断つことで浮かせた分を「克己献金」として取り分けておき、受難節の終わりに「愛の施し」として必要な団体や活動に献げる、ということが勧められてきました。ただ自分の中だけで完結してしまうような断食ではなく、隣人愛を実践できる取り組みとして、今でも多くの人たちが実践しています。

ところで、ルカ福音書は、主イエスが荒れ野で四十日間を過ごされたときのことを、「**何も食べず**」とは伝えていますが、断食とは明言していません（同じ出来事を伝えるマタイ福音書は「**昼も夜も断食し**」と明言しています）。主イエスがご自分の意志で断食を敢行されていらしたのであれば、たとえ空腹を覚えられたとしても、そこで気の迷いが起こることなどなかったでしょう。しかし、ルカ福音書は、あえて「断食」であることを明言しないことによって、「空腹」の事態に焦点を当てようとしているのかもしれません。

「断食」は、確かに、わたしたちの信仰実践として考えるならば、裏腹な側面を持つものです。本来は、自分の肉体的欲求から離れることで神への思いに集中するためになされるものなのでしょうが、うっかりすると、「断食」の実践そのものが目的になってしまったり、「断食」によって別の目的を達成しようとしたり、ということが起こってきてしまうのです。自分の意志で始めた「断食」が、神に向かうことに結びつかなくなってしまうのです。

**試された《自分》**

「空腹」は、わたしたちの生理現象です。自分の意志で食べなかったのであろうと、食べたいのに食べ物がなくて食べられなかったのであろうと、食べなかった結果、生理現象として起こってくるのが「空腹」です。

空腹を苦に感じない人もいますが、中には空腹になるとイライラして怒りっぽくなる人もいるでしょう。それは自然なことです。空腹や喉の渇きが続いているのに平気でいたのでは、生命が脅かされます。旧約日課の申命記で語っているモーセが、イスラエルの民をエジプトから導き出して、荒れ野の旅を始めたとき、人々が繰り返し空腹や喉の渇きを訴えてモーセに不平不満をぶつけたことを、聖書は伝えています（出エジプト記など）。空腹で不満を爆発させたときには、マナと呼ばれる食べ物を与えてもらうことで、喉の渇きを訴えたときには、岩から水を出してもらうことで、人々はようやく落ち着きを取り戻したのです。申命記で触れられている「**マサにいたときにしたように**」（申 6:16）というのは、喉の渇きを訴えた人々に水が与えられたときのことを指しています（出 17 章）。

主イエスも、わたしたちと同じように**空腹を覚えられた**というのですから、空腹によって生じてくる心理的なことも、そのときお感じになられたということなのではないでしょうか。もちろん、空腹だからといって、だれもがあの荒れ野を旅したイスラエルの人々のように不平を口にし、不満を訴えるようになるわけではないでしょう。主イエスも、そこは平然とされていらしたのかもしれません。けれども、空腹を覚えれば、心身ともに食べ物を欲する。そのことは、主イエスもまた、同じだったのではないでしょうか。この、食べ物を欲する自分の求めを、どのようにして満たしたらよいか。それが、問題なのです。

わたしたちは、「荒れ野の四十日」に倣って、受難節を過ごす。主イエスの「断食」に倣って、受難節の実践をする。それは、教会の先人たちが残してくれた、貴いことです。けれども、まさにそのような実践に取り組む中で、わたしたちは、主イエスが向き合われたというところに、思いを向けていかなければなりません。「誘惑」の問題です。「試み」の問題です。

主イエスは、悪魔と対峙され、三つの誘惑の問答へと引き出されました。第一はパンの誘惑、第二は権力・繁栄の誘惑、第三は栄誉・名声の誘惑、と言ってもよいかもしれません。悪魔は、誘惑して言いました、「**この石にパンになるように命じたらどうだ**」、「**この国々の一切の権力と繁栄とを与えよう**」、「**ここから飛び降りたらどうだ**」、と。それに対して、主イエスは申命記の御言葉を引用して、悪魔の誘惑を退けられました。

ここで注意すべきは、主イエスが一体何を退けられたのか、ということでしょう。主イエスは、パンを否定されたのでしょうか。そうではありません。権力や繁栄は悪だとされたのでしょうか。そうではありません。主の御業を栄誉とすべきではないと言われたのでしょうか。そうではありません。主イエスは、悪魔が向けさせようとした視点を、拒まれたのです。「自分」にばかり目を向ける視点を、主イエスは退けられたのです。

**「神の子ならば」**

悪魔というものは、真っ黒な姿をしたおどろおどろしい様で近づいてくるわけではありません。優しく、わたしたちが知っている言葉、大切にしている言葉で、近づいてくるのです。「あなたが神の子ならば…」と。

主イエスが、そう言われたのは当然ですが、それは、わたしたちに対しても悪魔は「あなたは神の子なのだから…」と言って近づいてくる、ということです。もっとわたしたちが親しんでいる言葉にするならば、「あなたはクリスチャンなのだから…」と言って近づいてくるのではないでしょうか。

わたしたちは、招かれて教会に連なり、礼拝にあずかり、ここで神の御業に触れ、御言葉によってキリストと出会い、洗礼へと導かれてきました。それは、わたしたちの意志によって為したように見えて、実のところ、神に導かれ、聖霊に引き回されるようにして、信仰者として生きる道に至らされてきたのではなかったでしょうか。そのようにしてあずからせていただいた洗礼を授けられて、わたしたちは、「あなたは神の子」と呼び合う教会の群れに組み入れられました。この群れに連なる者として、周囲からは「あなたはクリスチャン(キリスト者)」と呼ばれるようになりました。

ところが、これが重いという方がある。「わたしが神の子だなんて、とんでもない」とおっしゃるのです。「わたしは、教会を一歩外に出たら、クリスチャンであることは隠しています」と言う方さえあります。確かに、信者でない家族がある方は、家庭の中で戦っていらっしゃるかもしれません、「あなたは、それでもクリスチャンか」と非難するご家族との間で。

けれども、それこそが、主イエスが向き合われた「誘惑」なのではないでしょうか。わたしたちの目を、いつも「自分」に向かわせようとする誘惑です。「自分」の欲する「自分」に、「自分」はなることができているだろうか。「自分」の求めを満たすために、「自分」は行動しているだろうか。「自分」があるべき姿であるために、「自分」を神に守ってもらっているだろうか。そう、いつも「自分」が問題であるように仕向けられているのです、「自分」という「悪魔」によって。

主イエスは、「自分を捨て、日々、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい」(ルカ 9:23) と言われました。それは、自暴自棄になることでも、無私無欲になることでもなく、自分の命を得る道です。神からの命を得る道です。

「神」が、その口からわたしたちに必要なものを与えてくださるのです、パンも、御言葉も。「神」が、わたしたちにこの世で生きるのにふさわしい力も富も与えてくださるのです、御業のために豊かに用いることができるように。「神」が、わたしたちの命を守り、生かしてくださるのです、定められたときを神を証しする器として共に生きるために。

イスラエルの人々は、エジプトではなく、荒れ野で「民」として試みを受けました。わたしたちは、荒れ野の中の「教会」で試みを受け、ここで、「自分」を捨て「神」によって生きることを学び、この世へと遣わされて行くのです。